「えぞ但馬牛」造成の歴史と肉牛振興の取り組み

道　央　農　業　協　同　組　合
営農生産事業本部酪農畜産販売課
林　　寛峰

１．江別市の概要

（１）地勢

江別市は、石狩平野の中央に位置し札幌市まで２０分、北海道の表玄関千歳空港まで４０分と近いことから交通のアクセスには大変恵まれている地帯である。農業は、水稲、酪農を中心とし、小麦、大小豆などの畑作、肉牛経営が営まれ、近年はブロッコリーの作付け面積で全国一になっている。

（２）自然

全般的に平坦な地勢を形成しており、主流である石狩川や夕張川などの支流河川を合わせて石狩湾に注がれている。これらの流域と低地に広がる泥炭地は、土壌改良により肥沃な水田酪農地帯を形成している。南西の高台から北に連なる一帯の、火山性埴土地帯には市街地が形成されている。特に南西部に広がる、野幌森林公園には広葉樹、針葉樹林が広がり、野生動物も多いことから市民の憩いの場となっている。

（３）気象

江別市の平均気温は、6.7℃で北海道の中心から見ると温暖であるが、平均から見ると冬はやや寒く、夏はやや暑い準大陸性気候である。風は、四季を通じて強く４～５月頃には強風が吹く。最深積雪は 196 ㎝で山間部に比べて少なく、降雪は１１月下旬から翌年４月上旬まで続く。

２．農業生産の構造

農業生産構造は、泥炭地の基盤整備を行い大規模な水稲地帯として発展し、転作により小麦、大小豆などを始めとする畑作が増加している。特に、春小麦はブランド化され全国的にも有名である。

（１）農家戸数および飼養頭数

ＪＡ道央江別営農センターの組合員数は令和３年度 7 月現在で 449 戸であり、酪農業が 37 戸、肉牛と水稲、畑作、酪農の複合経営が 16 戸である。肉牛飼養戸数は減少傾向にあるが、規模拡大が進んだ結果、ここ数年においては繁殖頭数が 350 頭前後で推移している。

（２）販売事業

令和２年度のＪＡ道央における江別地区の農畜産物販売金額は 3,889,272 千円で、うち生乳 595,568 千円、肉用牛 385,616 千円であり、畜産部門合計では 1,071,157 千円となっている。

酪農家の規模拡大と肉牛相場の高騰により、生乳販売額および肉用牛販売額ともに増加傾向にある。

３．江別市における肉牛導入の背景

ＪＡ道央江別営農センターにおける和牛の歴史は昭和４１年にさかのぼる。当時、石狩川右岸の築堤地買収による旧河原などの跡地利用の一つとして肉牛飼養計画が考え出されたのが最初である。

その後、江別市営牧野の造成が進められ、黒毛和種、ホルスタイン、シャロレー種などの飼養試験が実施され、昭和４４年の江別市牧野開設に伴い１０戸の農家が浜益より黒毛和種を２１頭導入したのが江別市の肉牛導入の始まりである。

米の需給調整により水田転作が始まり、有畜化による土作り、転作飼料畑及び堤外地の有効活用や水田農家の所得補完を目的に、道内各地より４２頭の黒毛和種が２０戸の農家に本格的に導入された。

昭和４７年には、宮崎県より１００頭の繁殖雌牛が数回に分けて導入され、飼養管理共励会も開催されるようになる。毎年のように府県からの導入が続き、臨時家畜市場が開設されるほど盛況になった。昭和５０年には黒毛和種種牛組合が発足し（組合員２２名)、本場の兵庫県の肉牛農家へ研修視察を行っている。

昭和５０年代に入り、肉用牛振興指定地区に指定されるなど肉牛経営が江別市に急速に定着していった。ＪＡの独自事業として（有）江別肉牛ファームを設立し、肉用牛集約生産基地育成事業により肥育一貫生産を開始したのもこの時期である。

また、昭和５７年には現和牛生産改良組合の前身である肉牛振興会(のちの畜産生産部会)が発足している。

兵庫県との繋がりは、昭和５０年の２月に研修視察を行ったのが最初である。その後、１０年間で１０１頭の繁殖雌牛を兵庫県から導入し、その後の江別和牛の基礎牛となりその血統の一部は現在まで引き継がれている。この中から、種牛の造成も行われた。

４．「えぞ但馬牛」のブランド化に向けた取り組み

平成２年に、道内ではいち早く肉牛のブランド化に取り組み「えぞ但馬」を商標登録し、販路拡大とブランドの定着を図っている。

食肉販売は「えぞ但馬牛食肉直販推進部会」(現「えぞ但馬ビーフ・クラブ」) により年数回程度の直販と、各種イベントにおける牛串販売などを会員自らが販売員となり実施している。

昨今の新型コロナウイルス感染拡大以前には、Ａコープや江別市民会館で実施した食肉販売には長蛇の列ができ、江別市内の中に確実に「えぞ但馬牛」ブランドの肉が定着している。

この他に、２０頭程度の肥育牛が毎年札幌市の飲食店との契約で出荷され好評価を得ている。

５．江別市における和牛改良

江別市の和牛改良は、導入当初においては種牛の本交により行っていたため改良速度が遅かった。事業団種雄牛等による人工授精が開始されたのは平成２年からであり、以降、改良速度は急激に速まった。現在ではＥＴ技術なども活用し、優良繁殖雌牛の造成に努めている。

平成 22 年に念願であった改良組合の認定を受け、種雄牛の選定と会員への交配推進を行うとともに、育種価を利用した優良繁殖雌牛の遺伝子資源を地域に保留するよう働きかけている。

これらの取り組みと飼養管理技術の向上が徐々に結果となって表れ、北海道枝肉共励会においても小規模産地ながら最優秀賞をはじめ優秀賞などへの入賞を果たしている。

平成 29 年に第 11 回全国和牛能力共進会宮城県大会第 9 区（去勢肥育牛の部）に、江別市として初めて北海道代表牛に選抜出品することとなり、長年の改良の成果が実を結んできている。

現在では、平成 28 年に誕生した江別市産種雄牛「茂清福」が現場後代検定中となっており、地域内でも積極的な交配と保留を推進しており、改めて地域ブランド「えぞ但馬牛」を持つ「江別らしい」牛づくりを目指している。

表１．江別市における主な出来事と黒毛和種導入(昭和)

年	出来事	導入先	頭数
昭和44年	江別市営牧野開設	浜益	21
昭和45年	水田転作開始	占冠、白老他	42
昭和46年		登別、砂川	47
昭和47年	飼養管理共励会開始	宮崎県	100
昭和48年	市営牧野美原地区にて臨時市場開設	長崎県	55
昭和50年	江別黒毛和種種牛組合発足、兵庫県視察		
昭和51年	江別黒毛和種特別セール開設	兵庫県	32
昭和52年	肉牛部会発足		
昭和53年	江別黒毛和種共励会開始 肉用牛生産振興指定地域に認定	長崎県	38
昭和54年	㈲江別肉牛ファーム設立 肉用牛集約生産基地育成事業により肥育センター建設		
昭和55年	兵庫県美方市場等へ研修視察	兵庫県	23
昭和56年	大雨による水害で肉牛20頭死亡	宮崎県	33
昭和57年	肉牛振興会発足、第4回全共視察(福島県)		
昭和58年		兵庫県	9
昭和59年	道外肥育先進地研修(東京、栃木)		
昭和60年	深川市に農協牧野開設		
昭和62年	第5回全共視察(島根県)		

表２．江別市における主な出来事と黒毛和種導入(平成以降)

年	出来事	導入先	頭数
平成元年	『えぞ但馬牛』を商標登録		
平成2年	江別えぞ但馬牛クラブ(青年部)発足		
平成3年	ホクレン白老市場出品	兵庫県	6
平成4年	種雄牛選定委員会発足	兵庫県	1(種牛)
平成5年	北海道枝肉共励会にて優良賞受賞	兵庫県	6
平成9年	北海道枝肉共励会にて優良賞受賞		
平成10年	黒毛和種特別セールが終了		
平成13年	ＪＡ合併により江別畜産生産部会に名称変更		
平成15年	北海道枝肉共励会にて優秀賞2席受賞		
平成16年	鹿児島県曽於家畜市場および県内種畜場視察	鹿児島県	7
平成19年	北海道枝肉共励会にて最優秀賞受賞		
平成20年		宮崎県、岐阜県	32
平成21年	北海道枝肉共励会にて優秀賞3席受賞 和牛生産改良組合申請手続きを開始	兵庫県、岐阜県	15
平成22年	認定改良組合となり江別和牛生産改良組合に組織変更	岐阜県	10
平成23年		岐阜県	8
平成24年	第10回全共(長崎県)選抜会に1頭出品、同全共視察 北海道枝肉共励会にて優秀賞3席受賞	岐阜県	10
平成25年	道外食肉直販先進地(鹿児島県)視察		
平成26年	えぞ但馬ビーフ・クラブ設立	岐阜県	9
平成27年	北海道枝肉共励会にて優良賞受賞		
平成28年	台風の影響により第32回北海道肉用牛共進会が中止	岐阜県、鳥取県	12
平成29年	第11回全共(宮城県)第9区に1頭出品、同全共視察	宮崎県、鹿児島県	9
平成30年	胆振東部地震により第17回北海道総合畜産共進会が中止		
令和元年	ふるさと納税の返礼品にえぞ但馬牛を登録	鳥取県	3
令和2年	新型コロナウィルスによりすべての共進会が中止	宮崎県	3

６．肉牛振興の取り組みと課題

江別市における肉牛経営はその大半が繁殖経営であり、生後 10 ヵ月齢前後の素牛での販売となる。素牛販売は、種牛本交の時代はホルスタイン農協家畜市場に江別黒毛和種特別セールを併設し販売を行っていたが、人工授精への切り替えにより平成 10 年を最後に以降はホクレン南北海道市場での販売へと移行した。

しかしながら、但馬系に偏った血統構成により有利販売が困難となり、市場ニーズに合わせた種雄牛の使用と繁殖牛の導入が積極的に行われるようになった結果、気高系や藤良系などの種雄牛を父に持つ繁殖牛が増加し、但馬系の濃い繁殖牛は年々減少の一途をたどった。

その結果、繁殖牛群は体積面での改良が進み、「江別の繁殖牛＝但馬の小さい牛」といったイメージもここ数年で特に改善された。

今後はこれまでの歴史を踏まえた上で、今一度、「えぞ但馬牛」らしさを追求していくことが必要であり、改良組合の目的である地域の特色を活かした「江別らしい」改良を、地域が一丸となって進めていくことが重要である。

極端に但馬系に偏った交配に戻るのではなく、これまでに改良された体積を保ちながら、皮膚のゆとりや骨の締まりなど、資質と品位の高さを求め、計画的な交配を行うことで江別らしい「えぞ但馬牛」の繁殖牛群を造成していくことが必要である。

他方、「えぞ但馬牛」ブランドは地道な販売活動と産肉能力の向上による肥育成績の安定により、地域に着実に浸透してきているが、農家戸数の減少に伴い肥育頭数も年々減少している状況である。

肥育牛の確保は喫緊の課題であるが、農家戸数は今後も減少していくことが想定されることから、ＪＡや行政が一体となって新規就農や経営継承などを進める体制を構築することが必要となる。

また、新規就農者の初期投資を軽減するため、既存の和牛飼養農家が新規就農者を取り込みながら飼料生産を共同化するなど、地域全体で就農支援体制や設備投資の軽減を図るなどの取り組みも重要である。

これらによって繁殖基盤を維持しながら、ＪＡや行政を絡めた拠点肥育センターの設立により地域内一貫生産体制を構築するなど、肥育生産頭数の拡大に向けた検討も必要となると考える。